

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)** こども園名〔京丹後市立峰山こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題		本年度こども園経営の重点（短期経営目標）
元気いっぱい 笑顔いっぱい こども園 だ〜い好き！” ～互いに認め合える心豊かな子どもをめざして～ 1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体で生きる力を育てる。 2 主体的に活動し、友達と関わりながら、夢中になって遊び込める環境を整え、持続力や協同力を育てる。 3 身近な人や地域とのかかわりをもつ力を育てる。 4 互いの良さを認め合い、心豊かに意欲的に活動する力を育てる。		○保護者と連携をもちながら、様々な行事や活動の内容を見直すことで、落ち着いた雰囲気の中、意欲的に生活や活動を進める教育・保育を行うことができた。 ○様々な実体験・感動体験の活動を通して、学びに向かおうとする姿勢や豊かな言葉力に繋げることができた。 ○園児が言葉で伝え合いながら主体的に協同活動を進めたことで、達成感や満足感を味わい自己肯定感に繋げることができた。 △子ども一人一人を受け止め関わることを心掛け、教育・保育を進めたが、それぞれの思いをしっかりと受け止め丁寧に関わるのが充分とは言えなかった。 △職員の資質向上のための園内研修に努めてきたが、実施の仕方や時間を確保するための体制などが難しく、充分に行なえなかった。		・園児自らが生活の仕方や健康に関心を持ち、規則正しい生活が習慣になるようにする。 ・様々な実体験や感動体験を通して、豊かな感性や言葉の力を養う。 ・「楽しいこども園」を基本に、遊びを中心とした活動の中で、コミュニケーション力や持続力、学びに向かう力を育てる。 ・園児の主体的に取り組む姿を見守りながら、互いの良さを認め合い、他者と関わる力を育てる。 ・保護者が安心して子育てができるように、子育ての不安に寄り添いながら支援する。 ・地域に開かれた園として、情報発信に努める。 ・滑らかな接続ができるように、峰山学園（保幼小中一貫教育）の連携を深める。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中一貫教育の推進 （保幼小接続）	『峰山学園』の連携 ふるさとを愛し、多様な人とながら学び、探究し続ける子どもの育成 ・確かな学力の育成 ・コミュニケーション能力の育成 ・評価を見通した取組の充実	・峰山学園経営会議を通して園児・児童の実態を交流する中で、共通の目標をもち、主体的・対話的で深い学びを軸とした教育・保育を進める。 ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえ、幼児期から中学校まで一貫した指導を園内で共有する。 ・遊びを通して人と繋がる楽しさを味わい、ことばで伝え合う力を育む。 ・「保幼小の架け橋プログラム」を反映しながら、小1スタートカリキュラム・アプローチカリキュラムの検証を私立園や学園担任会と共に、教育・保育内容の理解を深める。	○経営会議や公開授業・公開保育を通して、互いの状況を把握し、課題意識をもちながら教育保育を進めることができた。 ○幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を振り返りながら、園で大切にしていることを伝え、小中学校と連携を取ることができた。 ○コミュニケーション能力の育成を大切にしなが遊びを充実させ、言葉力の向上につなげることができた。 ○スタートカリキュラム・アプローチカリキュラムを担当保育教諭も一緒に見直しながら、私立園や学園担任会を通して学園内で共通理解することができた。 △学園の研修会や公開授業などに保育教諭が参加する機会があまりもてず、実際に小中学校の様子を見て学ぶ機会とならなかった。	・保幼小中間の連携が深まってきたことを感じているが、保護者や地域にどこまで伝わっているだろうか。配信など通し伝えていくことが必要である。 ・学園と同じ時に、保護者会と連携しあいさつ運動を行っているが、挨拶が返ってこない状況がある。人間不信の子ども達もいるのではないかなと思われる。乳幼児期の人との関わりを引き続き大切にしたい。 ・私立園と連携し、教育保育のねらいや内容を共有することが大切だと感じる。

教育課程	- 感動する体験や伝統行事などを大切にし、豊かな感性やコミュニケーション力を養う。 - 基本的な生活習慣や態度を育てる。 - 互いを認め合いながら、自分の思いや考えを表現したり行動したりし、意欲的に活動を進める力を養う。 - 日常的に園内外での安心・安全に過ごそうとする姿勢・態度を養う。	- 園内外での感動体験や発見などを通して、考えたり工夫したりしながら生活や活動を行う。 - 挨拶を通して、人と関わることの心地よさを感じられるよう保護者会と連携し、あいさつ運動を実施したり、生活点検表などを作成したりして、生活習慣を整えていく。 - 互いを認め合いながら、園児が主体的に話し合ったり協同的な活動を進めたりできるように綿密に計画をする。 - 人とのつながりの中で自分らしさを発揮し、自信をもって意欲的に活動を進められるよう環境を整える。 - 園児の生活や発達の状況を把握し、個々に合った助言や援助・指導を行う。 - 園外保育を通して、実際に交通ルールを体験したり、園内では生活や遊びを通して集団でのルールを園児と考えたり、知らせたりしながら、様々な場面での危機管理について学ぶ。	○様々な活動を通し、実体験や感動体験を大切にしながら教育・保育を進めることができた。 ○職員同士が同じ保育観をもちながら連携し、子ども達が主体的に取り組んで活動を進めることができるよう行事の在り方を再確認した。 ○子ども達の育ちの背景を職員間で共有し、助言や指導などを考えながら関わる事ができた。 △保護者会と協力しながら、あいさつ運動に取り組んだが、その時だけの活動や行動になってしまい、継続ができなかった。 △熱中症の危険から、園外散歩に出掛けて実際に交通ルールを体験したり考えたりする機会が十分にもてなかった。園内で交通ルールを学ぶ機会もあったが、子ども達が実際に体験する学びとしては不十分であった。	- 一年を通し体づくりに取り組み、持続する成果が子ども達の遊びを見ていると感じる。 - 様々な行事に目的をもって活動・参加していることがうかがえる。取り組む際の目的やねらい、教育・保育の大切さを保護者にも伝えられている。 - 子どもが「したい」と言う気持ちを大切に、自信をもって活動する姿が見られる。 - 環境に工夫され、安心、安全面にも気を付けられている。
子育て支援	子育ての不安に寄り添い、安心して子育てができるように支援する。	- 保護者の思いや不安な気持ちに寄り添いながら、相談しやすい雰囲気をつくり丁寧に対応をする。 - 園開放や園庭開放・懇談会などを通し、保護者同士が交流し合える場を提供する。 - 園児や家庭の実態を把握し、保護者との連携を丁寧に行い、個々に合った支援や対応をする。	○相談しやすい雰囲気に関心掛け、丁寧に対応することができた。また、職員からも率先して保護者に声を掛け、相談にのったり子育てについての話をしたりし、それぞれの不安に寄り添うことができた。 △個人懇談を中心として丁寧な対応はできたが、クラス懇談会など大勢で話す機会がもてず、保護者同士が気軽に交流できる場を提供することができなかった。	- 支援センターに祖母との参加も見受けられ、利用しやすくなっていると感じる。 - 親の育児の低下を感じる。支援してもらって当たり前と言った風潮も見受けられ、園を通して子育ての大切さや関わり方など機会を見て伝えていってほしい。
研修 (教員の資質向上・人権教育)	- 園内研修の充実を図り保育教諭の資質向上(人権を含む)に努める。 - 保育支援システムやICTの活用を効率よく進める。	- 職員同士で保育の振り返りや意見交流などの時間をもったり、指導力や関わり方(人権)など学び合ったりするためにドキュメンテーション・公開保育・担任会・事例研修などを活用し、保育教諭の資質向上に努める。 - 保育支援システムを活用し、教育・保育の実践に活かすと共に、業務の見直しを進める。	○人権について、園内研修を重ね、職員の人権に対する意識改革、質の向上に繋げることができた。 ○各クラスや学年がドキュメンテーションを活用し、教育・保育を保護者に伝えたり、連絡事項や行事の様子など機会を見て、保護者に配信したりすることができた。 △ICTの活用は進んできているが、現状をふまえながら業務改善につながるような見直しを進めていく必要がある。	- 行事等様々な物が手作りされているが、時間がない中で先生たちの大変さが伺える。 - 不適切な声掛けや関わりなどは見られず、適切な教育・保育がされている。
次年度に向けた改善の方向性	- 園の取組や活動などを積極的に配信し、一貫教育での縦の繋がりを大切にしながら職員も一緒に連携を深めていく。 - 実体験や感動体験を大切にしながら、様々な活動に子ども達が主体的に関われるよう進めていく。 - 活動や行事を振り返り工夫しながら、開かれた園として保護者や地域に取組を発信し、教育・保育を進めていく。 - ICTの活用を進めながら、質の高い教育・保育の実践に努める。			

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)** こども園名〔京丹後市立大宮こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題		本年度こども園経営の重点（短期経営目標）
○人との関わりや体験を通して、心豊かでたくましく、生き生きと遊ぶ子どもの育成 ・心も体も元気な子ども ・のびのびと遊び、感性豊かな子どもの育成 ・人の話を聞き、感性豊かな子どもの育成 ・人の話を聞き、自分の思いや考えを言える子どもの育成 ○テーマ 『わくわく げんき えがおのわ』 ～伸び伸びと遊び、ともに育つ子どもをめざして～		○大宮学園の教育目標や方針を公開保育や実践報告などを通して研修することで共通理解をすることができた。 △自然に恵まれた地域ではあるが、交通量の多さからの安全確保が難しいため園外に出る機会が少なかった。園庭や園内の環境を整え、自然体験や身体を使った遊び、地域の人との交流など充実を図っていきたい。 ○年間を通して毎朝サーキットを行うことで生活リズムが整い、朝の持ち物の始末が習慣付き意欲的に取り組むことができるようになった。 ○医療的ケアの必要な園児や国籍の異なる園児、障害のある園児など様々な背景をもつ園児がいる中、生活や遊び、異年齢交流などを通してそれぞれの違いを受け入れ、一人一人の良さを生かすことで、思いやりの気持ちや認め合う豊かな心が育ってきた。 △様々な体験から自分の思いや考えを伝えることの嬉しさを感じる園児が増えてきたが、うまく伝えられず友達や保育教諭に補ってもらい話すことを経験している園児もいる。		・戸外活動、運動活動の充実による基礎体力の向上と望ましい基本的生活習慣サイクルを構築する。 ・友達との関わりを通して多様性を認め、自分らしさを発揮しながら育ちあう教育保育を進める。 ・園の環境の充実を図り、主体的に環境に関わりながら友達と一緒に様々な遊びや活動する場を保証し、豊かな感性やことばの力を養う。 ・地域の人や文化に触れる機会を設け、生活体験や社会体験を豊かにする。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中 一貫教育 の推進（保 幼小接続）	・大宮学園の教育目標をもとに基本方針や取組内容を理解しながら教育保育を進める。 ・保園小の連携を密にし、一貫性、連続性のある指導に努める。	・学園コーディネーターを招いて園内研修を行い、園の教育 保育と学園の教育目標の一貫性を確認し、全職員で共通理解して実践していく。 ・アプローチプログラムを基に、教育保育内容を検証しながら架け橋期の教育保育活動を進める。	○学園の方針を園内で共通理解するために学園コーディネーターを招いて研修会を開き、園と学園の教育目標の一貫性を確認し共通理解することができた。 △学園の担任会や連絡会などを通し連携を密にしてきたが、体験入学において園と小学校のねらいの違いが浮き彫りになった。園と小学校間で交流活動のねらいや内容をしっかり共有するとともに、架け橋プログラム作成の必要性も感じる。	・学園の便りで様子がよくわかる。 ・運動会や発表会の行事などに小学校長が来賓で来られていて連携が取れていることを感じた。 ・挨拶は人をつなぐ言葉なので、学園の取組として続けてほしい。
教育課程	・楽しい園生活を過ごせるようにする。 ・主体的で伸び伸びと遊ぶ力を育て、遊びを学びにつなげる。 ・人とつながることの喜びを味わえるようにする。	・幼児理解に努め、一人一人の園児が個性を発揮できる教育を推進する。 ・築山の環境を生かし、園児の学びを豊かにする園庭の環境づくりを目指す。 ・大宮学園の取組「ハイタッチモーニング」を定着させ、心を育成するための教育活動の充実を図る。	○興味や関心を引き出す環境をつくることで、好きな遊びを自ら選び楽しみ、個性や想像力を発揮しながら楽しく学びを得ることができた。 ○海と星の見える丘公園の野木園長の協力を得て、築山環境整備を行うことで、人とのつながりを喜び、自然環境への興味、関心や、体を使った遊びの楽しさも感じるすることができた。	・園周辺の交通量が多いため、園外保育には十分気をつけ、地域の駐在さんをお願いするなどして安全面の強化に努めてほしい。

	・直接体験からの感動を経験し、ことばの力の育成に努める。	・異年齢や地域との交流を行い、生活や遊び、様々な体験を通して思いやりの気持ちや人と関わる楽しさを感じられるように進めていく。 ・話したい、伝えたい、聞きたいと思えるような様々な遊びや体験ができる環境づくりをしたり、振り返りの時間や場をもったりする。	○大宮学園の「ハイタッチモーニング」を通して、人とつながる喜びを感じたり、異年齢の友達と一緒に菜園活動や琴の演奏、お茶会など交流活動を実施したりする中で、他者と関わる大切さや楽しさを実感し、思いやりや社会とのつながり、地域への愛着も深まる様子が見られた。 ○安心できる環境の中で、直接体験や感動体験を通して、自分の思いや考えを伝えようとしたり、振り返りの時間をもったりすることで、伝わることの喜びを感じ、ことば力の育成に繋がった。	・築山の環境は子ども達が遊びたいと思えるようになっていてとても良いと思う。保護者も巻き込みながら園庭の環境づくりができればよいのではないかな。
子育て支援	・保護者が安心して子育てができるよう支援する。 ・家庭の教育力向上を図るとともに家庭と連携し、「共育て」を目指す。	・日頃から保護者の話や相談に耳を傾け、一緒に課題解決に向けて進めていく。 ・月2回定期的に園庭開放を行い、園児の姿を見守りながら保護者同士が交流したり、保護者が気軽に職員と話したりできるようテーブルやパラソル、椅子などを設置して場を整える。 ・エントランスにテーブルや椅子を設置し、保護者向けの絵本や育児書を置くなどし、保護者が集ったり安らいだりできる環境を整える。 ・園児の具体的な姿をできるだけリアルに伝え続けられるようホームページやドキュメンテーションなどを活用して配信し、信頼される園づくりに努める。	○週一回の保育ドキュメンテーションを配信したり、全職員で園児の姿を共有して担任以外の職員からも保護者に声をかけることができるようにしたりし、園全体で教育・保育を行っていることを保護者に感じてもらうように努めた。 ○送迎や園庭開放時に積極的に保護者と園の様子について話すことで、保護者は安心感をもち、園の方針や活動に対する理解が深まった。また、保護者同士が自然に交流できる環境を作ることで、保護者同士のつながりが強化され、園全体のコミュニティ感が向上した。 △延長保育利用のため直接、園での様子を伝えるにくい保護者もあった。個人懇談や保育支援システムをうまく活用しながら、より丁寧な連携を取っていきたい。	・多国籍の方や様々な事情を抱えている家庭が多いので、園が居心地の良い場所となり、相談窓口となるよう、丁寧で親切な対応をして信頼関係を築いてほしい。 ・保育支援システムで子どもの様子がよくわかると保護者も安心できるととても良いツールだと思う。
研修 (教員の資質向上・人権教育)	・園内研修の充実を図り、保育教諭の資質向上（人権を含む）に努める。	・年間研修計画に基づき事例研究や公開保育などを行い、保育教諭の資質能力の向上を目指した研修に取り組む。 ・大宮こども園の教育保育について全職員で園内研修を実施し、教育保育のあり方について共通理解する。 ・園内研修の内容を工夫し、研修の充実を図る。	○グループワークを中心に事例研究や研修報告などを工夫しながら行ったことで、全職員が思いや考えが出しやすく、資質能力の向上につながった。また、月毎の指導の反省では、成果と課題を他学年と共有したり、意見を聞いたりすることで、異なる視点や新たなアイデアを得ることができ、園全体の教育・保育の質の向上が図られた。	・時間の確保が難しいと思うが、よりよい保育・教育をするためにも研修をして、質の向上に努めてほしい。
次年度に向けた改善の方向性	○大宮学園の新たな教育目標をもとに基本方針や取組内容を理解しながら教育保育を進める。 ○自然環境への興味関心をより深め、遊びや活動の中で地域や専門分野の方々とのつながりながらSDGsの意識を高める。 ○こども園と小学校の連携を強化し、特に、「架け橋期」における支援を充実させる。			

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)** こども園名〔京丹後市立網野こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題		本年度こども園経営の重点（短期経営目標）
『園児自らが主体的に環境に関わり、心豊かでたくましく生きる力を育てる』		○網野学園経営会議や全体研修会の参加報告等を通し、学園で育成したい非認知能力について職員間で共有した。また授業研究会に参加し、小中学校の教職員と意見交流をしたことで園での教育・保育を言語化や明文化する等、実践に向けた取組を定着させることができた。 △園では温かい雰囲気づくりや一人一人に応じた配慮を心掛けてはいるものの、生活習慣においては、それぞれの家庭で認識の差があった。また、家庭の事情や保護者の多様性を理解し、対応する難しさも感じた。 ○保育者が遊びや行事を見通し、園児が自己決定をしたり、やり切ろうとしたりする雰囲気をもつ等、環境の工夫が園児の主体的な遊びの充実につながった。 △教育・保育における人権意識の大切さを重視しているが、関わり方や捉え方は職員の意識の差にも係わるので、機会を捉えて研修をしていく必要がある。 ○教育・保育内容や園児理解、支援策について等、ベクトルを合わせて実践できるようOJTを重視し、職員同士のやり取りの活性化を図ることができた。		・改めて遊びの中の学びや非認知能力の育成について、網野学園での取組や研修等を踏まえ共有し、実践や検証をしていく。また、アプローチプログラムを指導計画に反映させながら、架け橋期の充実を図るとともに、さらに小学校との連携を密にしていく。 ・乳幼児教育・保育の中で意識したいSDGsの項目を選定したり、捉え方を見直したりして、職員自ら進んで取り組むような環境づくりをする。 ・園児一人一人を丁寧に見取り、子育て支援や家庭支援を重視しながらウェルビーイングを探り、高めていく。 ・危機管理の徹底を図るとともに、心身共に豊かな遊びや生活が展開できるよう努める。 ・職員一人一人が人権意識を基盤に探究心をもつとともに、主体的に同僚性やOJTを生かしながら、質の高い教育・保育につなげていけるよう職員同士をつないでいく。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中一貫教育の推進（保幼小接続）	・「網野学園」の教育目標をもとに、目指す子ども像や基本方針を念頭におき、園での教育・保育を進める。 ・園児と児童の交流の機会や相互理解を深めながら、互惠性のある取組を進める。	・網野学園で研究する第2期『未来を拓く学校づくり』の取組を確認したり深めたりしながら、教育・保育の中で育む非認知能力と認知能力の相関性について探っていく。 ・園児と児童の交流の機会や内容を見直し、『架け橋期』を意識した連携の在り方を共有し、実践する。	○京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会で公開保育をするにあたり、子どもの姿から、非認知能力と認知能力を丁寧に捉え直したり、職員間で共有したりすることができた。相関するところはあるが、就学前では、非認知の部分（土台）を積み上げていくことの大切さを確認し合った。 △小学校からのアプローチによって交流が密になり、連携の強化にはつながったものの、『架け橋期』に関しては踏み入れることができなかった。今後、学園の中で架け橋プログラムを作成していきたい。	・園と小中学校がお互いの立場で満足感や充実感のあることを1つずつ積み重ねている。それが大切なことである。 ・授業研究会をはじめ、今年度は特に園と小中学校との連携交流活動が多かった。実際保育を参観したり、網野学園のたよりを見たりする中で、一貫教育が根付いていることがよく分かった。

教育課程	『包み込まれているという感覚』を基盤に、園児の安心や安定的保障をしながら、心豊かに園生活が楽しめるようにする。 - 探究的な遊びが展開できるよう、環境や援助の工夫をする。 - 遊びと非認知能力の相関性について、指導計画に反映させながら実践を重ねる。	- 多様性を踏まえながら園児や家庭に適切な支援が提供できるよう、園内で作成した『こころの育ち指標図』をもとに、全職員の連携を強化し、実践する。 - 探究心を高めながら遊びを展開していくことができるよう、園児の興味や関心を丁寧に見取り、保育者も共に心揺さぶられる遊びや活動を共有する。 - RV-PDCA を充実させながら、マネジメント効果を実践に生かせるようにする。	○園児一人一人を丁寧に見取り、個別最適こそがウェルビーイングにつながることを園内で共有した。園内研修には欠かさず『心の育ち指標図』をもとに話し合い、実践につなげていった。 ○「なぜ」「もっと」等の言葉や思いを遊びの中で価値付けをして、園児と保育者が共主体となって広めたり深めたりしながら進めることができた。 △保育者の資質やそれぞれの保育の在り方を助長するような指導には至らなかった。	- 一人一人の思いややる気を大切につなげて教育・保育を進めている。保育者が子どもに寄り添い、主体性や長所を伸ばしている様子が随所に見られた。 - 非認知能力やウェルビーイングを掲げて1年間取り組んでいたが、意味の分からない保護者もあったと思う。エピソードをもとに具体的に伝えることで、さらに成果や好評を得ることができたのではないかな。
子育て支援	網野学園の取組を啓発しながら、家庭と連携し、基本的な生活習慣の確立と定着を目指す。・園開放や園庭開放日を設け、親子で楽しさを共有できる場の提供をする。	- 網野学園リーフレットを活用したり、『網野学園家庭学習頑張り週間』の取組意義を伝えたりしながら、基礎基本の定着が学習基盤になることを啓発する。 - 親子や保護者同士が交流できる場を通して、こども園での様子を知ったり、子育て情報を交流したりすることができるようにする。	○『網野学園家庭学習がんばり週間』の定着に加え、京都ノートルダム女子大学の高井特任教授による『子育て講演会』や、『学びスタート調査結果』等、直接的または間接的にも子育て支援に係わる取組を充実させた。 △園庭開放は好評だったものの、園開放への参加が少なく、保護者同士の情報交流の場にはなりにくかった。網野地域子育て支援センターが拠点となっていると感じる。	- 保護者からの依頼で面談や子育て相談を受けている園の信頼関係や体制づくりは今後も続けてもらいたい。 - 支援センターがこども園と離れているため園児との交流がもちにくかったり、土曜利用者の制限があったりなど課題もあるのではないかな。
(A) 研修(教員の資質向上・人権教育)	非認知能力の育成や特別支援教育等を軸にした園内研修を進め、全職員の資質と人権意識の向上を目指す。	- 遊びと非認知能力の育成について可視化しながら同僚性やOJTを活用しながら、職員の人材育成につなげていく。 - 園児一人一人を丁寧に見取り、人権意識をもちながら適切な教育・保育にあたるための園内研修を充実させる。	○ギミックブラッシュアップシートの共通理解と保育構想シートを作成し共有したことは、専門性を高めるための大きな成果となった。全担任がメインとなる園内研修を行うことで、同僚性やOJTにつながる意義のある学びとなった。 ○人権意識を持続するため、学期ごとに全職員がチェックシートを活用し、振り返りを行った。また、園児や保育実践に対して忌憚のないやり取りができる職員関係が、適切な教育・保育に結び付いた。	- 保育者が自主的に園内研修をしていることは自分磨きにもなり素晴らしいことである。それが子どもの姿に返っている。保育者の表情や言葉、動き等を見ていて気持ちがいと感じる。 - 働き方改革の視点で考えると、保育者の資質向上をどのようにしていくかが課題である。
次年度に向けた改善の方向性	- 既存のアプローチプログラムを参考にしながらさらに、5歳児と1年生との学びをつなぐ『架け橋プログラム』を作成し、架け橋期の充実を図る。 - 網野学園の新たな教育目標や目指す子ども像、経営方針等を職員はもとより保護者にも周知し、自園の教育・保育計画に反映させるとともに、RV-PDCAを生かし、さらに質の高い教育・保育を目指す。			

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)** こども園名〔京丹後市立丹後こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点（短期経営目標）	
- 生活や遊びの中で様々なことに心を動かし、豊かな園児を育む。 - 地域に愛され、保護者に信頼される園づくりを進める。 - 職員同士が互いに学び合える組織づくりを進める。		○生活の中で一人一人の園児の声を聞き、気持ちに寄り添うことで自分の思いや考えを伝えようとする園児の姿がたくさん見られるようになった。 ○園の生活や活動の様子を動画やクラスだよりなどでアプリを使ってタイムリーに知らせてきたことで保護者と連携して教育・保育を進めることができた。 △正職員は、職員会議や日々の保育の振り返りをする中で援助や環境について話し合う機会をもつことはできたが、会計年度職員に細かく伝えることができないこともあり、実践につながらないこともあった。	「やってみたい！やってみよう！いっぱい遊んでつながって」～一人一人が輝き、育ち合えるこども園をめざして～ - 様々な人やものに関わったり触れ合ったりしながら、豊かな心を育てる。 - 友達と力を合わせたり異年齢児との関わりを楽しんだりしながら集団の中で育ち合える環境を設定する。 - 職員の連帯・協働意識の高揚を図り、「チーム」で取り組む体制をつくる。	
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中一貫教育の推進(保幼小接続)	『丹後学園』間の連携 - 幼児期の学びがどのように深まり、広がっていくのかを見通す。 - 児童期の育ちを見通した教育課程を編成する。	- 小学校との交流を通して幼児と児童の実態を知り、子どもの育ちへの理解を深める。 - 研修会や連絡会等を通して幼児教育と小学校教育の指導方法の違いを知り、互いの教育への理解を進め、幼児や児童の発達を捉えた環境の構成や教材の工夫をする。 - 小学校への滑らかな接続となるよう、スタートカリキュラムやアプローチプログラムを見直し、実践につなげていく。	○小学校との交流や授業参観、事後研究会等に参加することによって、小学生の実態を把握したり指導内容や指導方法について理解したりすることができた。 ○園の公開保育では、小中学校の先生に参加してもらい話し合う機会をもったことで幼児教育への理解を進めることができた。 ○子どもの実態や支援の仕方について、小学校と何度も連絡を取り合ったり話し合ったりすることで、子どもも保護者も安心して学校生活を送ることができた。	数年前と比べると交流の回数や内容が変わり連携が進んでいることを感じた。
教育課程	教育・保育活動の充実 - 夢中になって生活や遊びに向かおうとする園児を育てる。 - 心身共に健康な園児の育成	- 園児が興味をもって、自分から素材・用具等に関わることができるよう環境を整え、援助の方法を工夫する。 - 様々な人やもの、自然との関わりの中で見たり触れたりする機会をもち、不思議さや自分の思い通りにならないもどかしさ、思いやりの気持ちなど、多様な感情体験ができるようにする。 - 園児一人一人の個性や発達に即した多様な経験を重ねる中で、十分に自己発揮して遊ぶ喜びや達成感を味わい、自信をもって行動できるように環境を整える。 - 自分でできることの範囲を広げながら、個々に合わせて援助し、生活に必要な基本的生活習慣や	○園児の興味・関心や発達に合わせて環境を整えることで、興味をもったものを自ら遊びに取り入れたり繰り返して遊んだり試したりする姿が見られた。 ○異年齢での活動を積み重ねることで、小さい組の友達に対して優しく声をかけたり手をつないだりする姿が多く見られるようになった。 ○園児一人一人の個性や発達に即した環境や活動を準備することで友達と一緒に試したり工夫したりして好きな遊びを十分に楽しむことができ、達成感を味わい自信をもって行動する姿が増えてきた。 ○年に2回生活点検をしたり、登園が遅い家庭には懇談をして生活リズムを整えることの大切さについて伝えたり	- 職員の仲の良さが子ども達の育ちにつながっている。 - また、昨年と同じではなく園児の姿に合わせて活動の内容も変化している。

	・ 自他共に大切に思える園児の育成	・ 態度を身に付けることができるようにする。 ・ 体を動かす気持ちよさを感じられるよう多様な動きができる機会や場所、環境を充実するようにする。 ・ 自分の思いを表現し伝わる喜びを感じられるように、全体場で発表したり、友達同士で話したりする機会をつくる。 ・ 様々な年齢や立場の人との交流を実施し、ときどきわくわくするような感情体験が味わえるようにする。 ・ 生活や遊びの中で、自分の思いや考えを伝える、相手の話を聞く、受け止めるなどの体験を通して互いを認め合い大切にすることを育てる。	したことで、早く登園する園児が増え生活習慣の見直しにつながった。 ○天候に応じて園庭や室内でマラソンやサーキットを継続して続けることで多様な動きを経験することができ、体づくりにつながった。 ○一人一人の思いを読み取り言葉に変えて伝えることで自分から担任に伝えたり友達同士で話したりする姿が多く見られるようになってきている。 ○クラスの担任が一人一人の思いを丁寧に読み取りじっくり関わり、その思いをクラス全体に伝えることで子ども同士で認め合う姿が広がりつつある。	・ 誰に対しても挨拶をしたり、話しかけられると自分の言葉で答えたりする園児が増えたことはとても嬉しく感じる。
子育て支援	・ 保護者と連携し、それぞれの家庭に合わせた支援をする。 ・ 支援を要する園児に対しての支援策について園全体で考える。	・ 子どもの育ちや乳幼児期の教育・保育への理解を深める機会をつくり、園児の健やかな成長を支援する。(個人情報には十分留意しつつ、園日よりクラス日より、アプリを使っての動画配信等) ・ 懇談会等で発達状況を伝えたり家庭の様子を聞いたりしながら、園児の課題や今後の方向性について保護者と共通理解し、医療や療育などの関係機関と連携し、一人一人に合わせた支援ができるようにする。	○登降園の際に園児の様子を詳しく伝えたり、たよりやアプリなどを使っての動画配信を積極的に行ったりすることで、園児の様子や成長している姿を共有することができた。 △懇談会や登降園の際に丁寧に園児の様子を伝えたり、懇談をしたりして担任と保護者と共通理解することはできたものの、クラス懇談会を実施できなかったため、保護者同士をつなぐ機会を十分に設けることができなかった。	・ アンケートの結果からも保護者との関係がうまくいっていると感じる。日頃から職員が丁寧に関わっているからだと思う。
(A) 研修(教員の資質向上・人権教育)	・ 資質向上を目指し、意欲的に取り組もうとする職員を目指す。 ・ 保育研究を継続的に実施し、指導改善に生かす。	・ 園児一人一人に応じた指導をするため、各クラスの職員同士が園児の発達課題を共有し、援助や環境の工夫について話し合う機会をもつ。 ・ 職員同士が支え合い、協力し、高め合える職場環境や子どもの姿を自然に語り合えるような雰囲気づくりをする。 ・ 全職員が研究テーマの目的・仮説・方法について具体的に理解できるよう研修の場をもち、教育・保育が意欲的に進められるようにする。	○付箋を用いてのワークショップ形式で月反省を行うことで、新人職員も自分の意見を発表する機会がもて自信につながった。また、援助や環境について職員同士で意見を出し合う姿が多く見られるようになった。 △日々の業務に追われ、十分な研究の為の時間をつくるのが難しかった。 ○職員同士が、活動や子どもの様子について語り合ったり相談し合ったりする姿が多く見られるようになった。また、職員同士が互いを認め合い思いやる姿を見せる事で、園児の中にも遊びや生活の中で励ましたり認めたりする姿がたくさん見られるようになった。	・ 長時間園児がいる中で研修したり保育を振り返る時間をつくることは難しいと思うが、日頃から園児の様子について語り合うだけでも学びになっているのではないか。
次年度に向けた改善の方向性	・ 一年生との交流や小中学校の教員との交流の内容を検討し、また公開保育を通じてより子どもの育ちへの理解を深められるようにする。 ・ クラス懇談会や参観を通じて保護者同士がつながることができるような機会をつくる。 ・ 園児の姿や活動を振り返り、子どもの発達や内面について園内研修を重ね、より深く理解できるようにする。			

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)**

こども園名〔京丹後市立弥栄こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題		本年度こども園経営の重点（短期経営目標）
1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体を育てる。 2 自ら様々な環境に関わり意欲的に遊ぶ中で豊かな心を育てる。 3 身近な人や地域に関わり、思いやりの心や人権意識、規範意識の芽生えを育む。		○学園内での公開保育と実践報告研修を通して、実際に園児が活動を進める姿や保育教諭の関わりや言葉掛けなどを参観してもらうことで、乳幼児期の大切な関わりや捉え方などを共通理解することができ、小学校との連携についても検証することができた。 ○保育教諭間で連携をとり、活動内容に応じた場や人数、音量など環境構成の工夫をし合うことで、少しずつ落ち着いて生活や活動を進めることができるようになった。 ○園児一人一人の気持ちの安定を図ることを第一に考え、園児の思いを受け止め、寄り添い関わることで、気持ちに折り合いをつけることができる園児が増えた。 ○朝の体の目覚めや体づくりのため、年間を通して計画的に体操やマラソン・サーキットなどを取り組み、園児同士や保育教諭と楽しみながら進めていくことができた。 △園児の姿を受け止め、寄り添う大切さを職員間で共有し同じ方向に向かって教育・保育を進めていくよう繰り返し話し合いを進めてきたが、それぞれの保育の考え方の違いから保育の進め方や関わりについて共通理解や連携に難しさを感じる時があった。		・一人一人が安心安定できる環境を整え、意欲的に生活や遊びに向かう中で基本的な生活習慣を身に付け、自立心を育む。 ・園児自らが周囲の環境に関わり活動する充実感を味わいながら、発達に必要な経験を積み重ね豊かな心を育む。 ・いろいろな人との関わりを通して、自分の思いや考えを伝えたり、人の話を聞いたりする等、コミュニケーション能力と思いやりの心を育む。 ・園児のあるがままの姿を温かく受け止め、自己肯定感を育み、相手の良さや多様性を認め合える柔軟な心を育む。 ・家庭、学校、関係機関及び、地域との連携を行い、充実した教育保育を進める。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中一貫教育の推進（保幼小接続）	・弥栄学園の教育目標を踏まえ学園の基本方針に基づき、取組を進める。 ・小学校との連携を密にし、スムーズな接続を図る。	・弥栄学園の重点課題と園児、児童、生徒の実態を把握し、不登校の解消などについて取り組む。 ・弥栄学園の諸会議や公開授業・保育などに参加し、全職員でスタートカリキュラム、アプローチプログラムの検証を行いながら、実践を重ね、幼少期に育成する資質、能力を明確にして、小学校への滑らかな接続を図る。	○1 園 1 小 1 中となり、その特色を生かすために何ができるのか学園内の会議や部会で考えて取り組んだ。その中で、各校園の指導や校風等を理解して互いに学び合うことで、10年間を見通した園児の支援の仕方等を考えることができた。 ○園小連携の中で、小学校と園生活の流れを共有し合い、安心して学校生活を過ごせるようスタートカリキュラムの見直しを図ることができた。 ○隣接している小学校のフェンスを曜日により中間休みに開放して交流を図ったことで、より1年生に親しみをもち交流活動を深めることができた。	・いろいろな交流や活動を行っていることは、たより等を見てたいへんよいことだと思っている。連携も進んでいると思うので、これからも頑張ってもらいたい。

教育課程	・保育教諭との信頼関係を基盤に安心、安定の中で園生活を楽しみ、自分の力で行動する充実感を育む。 ・基本的生活習慣を身に付け、見通しをもって行動する園児を育てる。 ・自分なりの言葉で表現したり、相手の話を聞こうとしたりする意欲や態度を育てる。	・一日が気持ちよく迎えられたり、送れたりできるように挨拶の大切さを知らせたり、人とつながる心地よさを感じられたりするような対応に心がける。 ・友達と一緒に体操、マラソン、サーキット遊びなど、体を使った遊びを積極的に取り入れ、健康な体づくりをする。 ・園内外の自然体験を通して、感じたことや考えたことを様々な方法で表現できるようにする。 ・一人一人の心情や発達を見取り、園児に寄り添い居心地のよい環境づくりや関わりを進めていく。 ・絵本などに親しみ、言葉の楽しさや美しさに気付き思いを巡らせ保育教諭や友達と同じ世界を共有し、心通わせる経験をする。	○登園時や活動中、気持ちが不安定になる園児の様々な姿があったが、寄り添い自己決定して行動できるよう援助をしてきたことで、落ち着いて生活する園児の姿が増えてきた。 ○登園してきた親子を5歳児の挨拶当番が迎える活動が3年目を迎えた。5歳児の元気な挨拶で園全体が活気づき、1日の良い始まりとなった。一緒に並んで玄関に立つ年下の園児の姿もあり、5歳児の姿はよい手本となっている。 ○発達に応じた体の動きを年齢ごとに考え、年間を通してサーキット遊びや運動を行うことができた。繰り返し活動することで、健康な体づくりができた。 △天候や気温などを考慮すると散歩に出る機会がもちにくく、いろいろな地域の自然に触れる機会が少なかった。 ○弥栄学園一斉に取り組んだ『家庭学習頑張り週間』を通して、絵本貸し出し回数を増やし絵本に触れる機会をつくることができた。	・学園の一斉挨拶運動で園に来ると、園児の元気な挨拶が聞こえてくる。大人も朝から元気をもらって嬉しい。恥ずかしくて声が出せない様子の園児もいるが、笑顔やハイタッチで返してくれるなど子どもなりにコミュニケーションを取ってくれることが嬉しい。 ・参観すると、行事等でいろいろな工夫が見られる。いつも保育者が子どもに寄り添う優しい姿がある。
子育て支援	・保護者の子育ての不安や悩みに寄り添い、喜びや楽しさを感じられるように支援をする。 ・未就園児の子育ての不安解消を図り、楽しく子育てができるように支援する。	・保護者が園児の成長に気付き子育ての喜びを感じられるように登降園時に園児の日々の様子を伝えたり、園だよりやクラスだよりの発行や保育支援システムでの配信をしたりする。 ・保護者の就労や家庭事情、子育ての悩みや不安、ストレス等配慮し、悩みを抱えている保護者への相談にのったり、リフレッシュ支援を行ったりする。(個人懇談、一時預かり保育等) また、不適切な養育等が疑われる場合は、関係機関と連携し適切な対応を図る。 ・こども園や地域子育て支援センターで、未就園児の親子や、出産前の保護者が育児を楽しんで行えるように相談にのったり、遊んだりできるようにする。	○保護者に行事や活動を知らせるために保育支援システムを通じて配信をした。特に乳児は写真で日常の様子を伝えることで、保護者から信頼を得ることができた。 ○園児の様子や面談等から家庭事情や保護者の悩みを知ることができた。その都度、園児や保護者を見取り、寄り添い丁寧に対応することに努めた。また時には関係機関と連携を図り、保護者や園児の支援を行った。 ○地域子育て支援センターを通して、入園前の子どもの遊びの姿を知ることができた。また、保護者の入園に関する悩みや不安などの相談にのり、園児が安心して入園できる支援につなげることができた。	・様々な家庭事情があると思うが、保護者も一生懸命子育てをしている。しかし、中には寂しさを抱えている子どもがいると思うので、保育者が受け止め温かく関わってほしい。保護者の頑張り認め子育てに気持ちが向くよう応援してあげてほしい。
研修	・園児一人一人の発達や家庭環境を考え、温かい関わりで支援できるよう職員の人権意識の向上を図る。	・園児のいろいろな姿を受け止めたり、寄り添ったりしながら自信をもって支援ができるような方法を学び合う。 ・日常的に保育内容についての話し合いの場をもち、保育を振り返り、園児一人一人によりよい関わりや支援が行われているかなど園内研修を行い、共通理解できるような職員会議をもつ。	○職員間でその都度、園児の姿から背景を見取り、支援の仕方を考え、共通理解しながら保育を行うことができた。多面的に園児を捉えようと職員間で話をする機会が増えたことで、いろいろな姿を見せていた園児が落ち着いて過ごせるようになりつつある。 △園内研修の参加人数や時間調整など、計画的に進めるための工夫が難しかった。	・保護者アンケートのなかで、園への信頼と保育者の温かい関りが嬉しいという評価が多く見られた。これは、園が頑張っている成果だと思うので、これからも頑張ってもらいたい。 ・職員の頑張りがよく分かるが、働き方改革を考え、負担になり過ぎないようにしてほしい。
次年度に向けた改善の方向性	○園児一人一人に対する職員の人権意識の更なる向上に努め、安心安定して生活し意欲的に遊びに向かう園児を育成する。 ○様々な地域の特色を教育・保育活動に活かし、豊かな心と健康な体を育む。			

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)** こども園名〔京丹後市立かぶと山こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題		本年度こども園経営の重点（短期経営目標）
こども園教育目標 「元気な体と豊かな心、生きる力を持ったたくましい子ども」 《元気 勇気 笑顔 つながれ仲間》 ～やってみよう！やってみよう！ 一人一人が輝くために～ 1. 園児自らが興味関心をもって環境に関わり、心豊かでたくましく、生きる力を育てる。 2. 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、人権を大切にすることを育てる。 3. 相手の思いを受け止めながら、自分の思いや考えを表現する力を育てる。		○一つ一つの活動に頑張る個々の姿をしっかり受け止め認めることで園児は自信を付け、自己発揮しながら活動を進める姿が多く見られるようになった。 ○定期的なドキュメンテーションの配信により各学年の保育内容について理解を深めることができた。また、アプリでの配信により保護者の既読が確認できるようになり、お願いやお知らせ等が周知しやすくなった。 ○裏山での遊びの環境を意図的に多く取り入れたことで、体を動かしたり、自然を通して感じたり考えたりする体験を積むことができた。 △伸び伸びと園生活を送る園児は増えつつあるが、友達のよさに気づき園児同士が認め合えるつながりは、十分にもてなかった。 △積極的に栽培活動を取り組んだり、飼育物を通して愛情や生命の尊さについて意識したりしてきたが、行動や態度に結び付けることは難しかった。		・自ら遊ぼう、活動しようとする意欲、態度を大切にしながら自己発揮できる環境や関わりを工夫し、様々な人や物と関わったり触れ合ったりしながら、豊かな心を育てる。 ・一人一人の内面理解に努め、良さを認め、発達の特性に応じた指導と支援に努め共に育ち合う集団をつくる。 ・身近な自然を意図的、計画的に遊びの中に取り入れ、主体的で協同的な活動ができる環境を工夫し、健康な心や体、豊かな感性を育てる。 ・生き生きと遊ぶ、言葉で伝え合う、互いに思いやり共同する力を育成するための教育活動、異年齢活動、体験活動の充実を図る。 ・小動物や植物、野菜などの世話を通して、飼育物にも命があることを気づき、思いやりやいたわりの気持ちを育み豊かな感性を育てる。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中一貫教育の推進（保幼小接続）	・「久美浜学園」のめざす子ども像をもとに、学園の基本方針を理解しながら取組を進める。 ・園所や小中学校の交流の機会をつくり相互理解を深めるとともに園内研修で学びを共有し、保育実践に活かす。 ・就学の際の円滑な接続、必要な支援の継続をめざす。	・久美浜学園経営会議を通して子ども達の実態から課題点を知り、共通の目的をもつ。 ・小学校との連携（スタートカリキュラムやアプローチプログラム）を見直し、スムーズな接続に繋げる。 ・園児と児童、生徒との交流が深まるような学校行事（運動会、学習発表会、マラソン大会など）に参加し、豊かな心の育成につなげる。 ・学園内の園所や小、中学校と合同研修の場に参加し、互いに教育の理解を深め、効果的な指導方法や指導の連続性、一貫性について研修する。	○経営会議や小、中学校の授業参観に参加することにより子どもの実態を把握し、支援や連携につなげることができた。 ○園生活の生活スタイルや教育、保育内容を知ってもらうことで、幼児期と児童期の教育を円滑に接続することができた。 ○小学校の行事に参加することによって発表会に向けての取組や意欲につなげることができた。また中学生との交流によってSDGsの意識を高めることができた。 △園の公開保育は学園内の幼児教育の理解につながっているが、研修会等は学校のように全職員が参加することができず、限られた職員へのみの参加であるため、園内での職員へのしっかりと周知の必要性を感じた。	・小中学校との連携をもつことで、こども園でどのような力を身に付けなければならぬのかを明確にし、意識して取り組むことが必要である。 ・保幼小中一貫教育をなぜ取り組んでいるのか、取組みや成果などを保護者へわかりやすく伝えていく必要性を感じる。 ・園の公開保育をすることによって、10の姿を意識することができた。

教育課程	・楽しい園生活を繰り広げる。 ・異年齢とかかわる機会を大切に、人ととかかわる楽しさを体験させる。 ・園生活を通して子どもの主体性や協同性を育てる。 ・様々な人との出会いを大切に、人と関わりを楽しめる子どもの育成に努める。	・朝マラソン、体操など友達と一緒に体を使った遊びを取り入れることで、体を目覚めさせ、リズムある生活が習慣となるようにする。 ・異年齢の活動を通していろいろな友達と関わり、葛藤体験を通して思いやりの心やあこがれの気持ちを持てるようにする。 ・失敗しても大丈夫と安心感を与えるような保育者の態度や肯定的な言葉がけのもと自己発揮できるようにする。 ・結果だけでなくそこにたどり着くまでの過程を認める。 ・集団でなければできないこと、大勢ですると楽しいことに気付かせ、他人に関心をもたせる。 ・身近な地域の環境に関わり、活動を展開する充実感を味わいながら楽しい経験を積み重ね、地域の良さを気づくようにする。	○朝マラソンや巧技台、鉄棒などを組み合わせたサーキットに継続して取り組むことで、友達と一緒に多様な動きを身に付けることができた。 ○異年齢の行動を真似てやってみたり、一緒に遊んだりする中で、我慢や悔しい気持ち、友達の役に立つ喜びなどの体験を重ね、活動を発展させることができるようになってきた。 ○様々な活動をする中で、自分の思いや考えを伝えようとする園児の姿がたくさん見られるようになった。職員が仲立ちをすることにより少しずつ互いを受け止め、認め合う姿も見られるようになってきた。 △近隣の果樹園などに度々熊が出没し、山遊びを通しての遊びを体験したり、散歩に出かけたりすることがなかなかできなかった。地域の良さが感じとれるように年間を通して園外保育等を計画し、地域に触れる機会を増やしていきたい。	・生活リズムを整えて、継続して体づくりをすることの必要性を感じる。 ・異年齢児と一緒に生活することにより、友達関係を広げ、思いやり、譲り合いの心を育てることができるので、持続して交流する機会を増やして欲しい。 ・地域の人にも協力してもらい交流する中で、つながる力を育てたり、地域の良さを見たり触れたりする機会を増やし、久美浜の良さを知って欲しい。
子育て支援	・保護者の気持ちに寄り添い、安心して子育てができるように支援すると共に保護者が子どもの成長に気付き子育ての喜びを感じられるようにする。 ・未就園児親子の子育ての安定を図る。	・登降園時に職員が玄関で迎え入れたり、見送ったりすることで、保護者がいつでも気軽に話や相談できるような雰囲気をつくるようにする。 ・園庭開放日や園開放日を通して、保護者同士が交流したり子どもの成長を見たりする場をつくり子育ての楽しさを共有できるようにする。 ・園児の様子をドキュメンテーションや動画配信等を活用した情報発信を工夫し、遊びが学びそのものである。ということを保護者に伝え共通理解を図り、信頼される園づくりに努める。	○登降園時、各クラスの職員と共に迎え入れたり送りだしたりし、何気ない話や相談に耳を傾け保護者との対話に心掛けることで信頼関係を築くことができた。 ○園庭開放日を設けることで園内のいろいろな年齢の親子が交流する場となった。また園開放日は、未就園児の親子が同年齢の子どもと遊んだり、子育ての不安が解消されたりする場となった。 ○各クラスの活動の様子を配信することで園での子ども達の様子を伝え、保護者と園の教育方針やねらい等を共有することができた。	・園庭開放や園開放をすることによって、園の保護者同士や未就園児の保護者と交流してつながりを深めることを続けて欲しい。 ・ドキュメンテーションはその日あったことをリアルタイムで保護者に知ってもらえて良いと思う。
特色ある園づくり	・地域の人や身近な自然環境を活用した教育、保育を取り入れ、目指す。 ・自然体験やSDGsについて考え、日々の生活の中でも意識付けていく。	・地域の人々の協力のもと泥田んぼ遊びや山遊びを通して、新たな疑問や発見から好奇心や探究心が芽生え、主体的に取り組むことから得られる達成感を味わうことができるようにする。 ・牛乳パックや空き缶の回収、ペットボトルキャップの収集また、微生物による堆肥づくりなどの取組からものや食べ物を大切にする態度を習慣化していく。	△泥田んぼや山遊びを始動しようとする熊騒動に遭遇し、自然環境を活用した教育保育を十分に行うことはできなかった。子どもの安全を第一に考えながら好奇心や探究心が育まれる環境を探していきたい。 △回収物の収集は保護者にも浸透していて常習化しているが、微生物による堆肥づくりは子どもたちに浸透することができなかった。目に見えない微生物の存在を子ども達にわかりやすく伝えたり、堆肥を土に混ぜたらどうなるかななどの興味付けをしたりなど工夫が必要であった。	・自然に触れて遊ぶことはとても良いことなので山遊びを再開し、園児と共に環境を整えて欲しいと思う。 ・年間通して、回収を継続しながらSDGsに興味をもったり意識したりする機会をもって欲しい。
次年度に向けた改善の方向性	・久美浜学園での保幼小中のつながりの中で、幼児教育で身につけたことが学習の基礎や姿勢のもととなることを伝えるために公開保育を行い、研修を重ねる。 ・保育の環境や援助の仕方について、各年齢のねらっていることを共通理解ができるように職員間での話し合いを重ねる。 ・自分の興味や関心のあることに取り組んだり、友達とコミュニケーションをとったりしながら、探究的な学び（実体験）ができるような保育を工夫していく。 ・地域の方との交流で、自然に触れたり地域の良さに気づいたり、豊かな心と健康な体を育んだりしていきたい。			